

入学試験問題

国 語

100点満点（50分）

（注意）

1. 問題冊子及び解答用紙は指示があるまで開かないこと
2. 問題は一～四、解答用紙は別紙
3. 試験開始後、問題冊子表紙・解答用紙に受験番号を記入すること
4. 試験終了後、問題冊子・解答用紙ともに回収

受 験 番 号

一、次の文章を読んで後の問いに答えなさい（字数指定問題において、句読点や「」は字数に含むものとする）。

このごろ、長く歴史というものに欺かれてきたような気がするのです。

ずっと、歴史は哲学に劣らぬ人間の知、学問の支えである、と①考えるともなく考えていました。歴史がわからなければ何もわからない。文学の勉強も、まず文学史から始めます。作品を読んでもいいのに、作品の歴史的知識を与えられます。学問の母とされる哲学ですら、哲学史が入門になります。

そういうわけで、②すべての学問分野は歴史的に整備されてきました。もつとも重要な体系であると言つてもいいでしょう。

そういう文化の中で育つたために、いつしか歴史信仰ともいふべきものを身につけているように思います。何ごとも **A** 的に考える必要があるように思ってきました。

③歴史というモノが本当にあるのか、という危ない考えをいだくようになったのは、かなりあとのことでした。きっかけは、E・H・カーの『歴史とは何か』（岩波新書）を読んだことでした。それまでは、歴史は絶対で、正しい歴史はひとつしかないようにぼんやり思っていたのですが、歴史は歴史家によってつくられるもので、歴史家の数だけの歴史がある、というカーの考えはたいへん新鮮でした。

歴史的事実は人類とともに古いのですが、歴史はことばで記録されるまで存在しなかった、ということは自分で考えました。その上、ことばというものが、あるがままを完全に表現することは決してないという反省もおこりました。言語による記述、記録はすべて一種の創作であつて、対象の現実、事実を再現したものではない、というのはどうやら本当のようです。

そういう言語しか表現手段のない状態は、最近の再生技術の出現、発達によって修正を受けなくてはなりません、④過去のほぼすべてにわたつて、きわめて再現性の低い※媒体に頼つてきた歴史は、記録というより物語といふべきです。歴史的に考えるというのは、過去を時間的、年代的に整理するということであつて、過去そのものを再現するのではないという認識が必要であると思います。

二十世紀イギリス女流作家ヴァージニア・ウルフの父親、レズリー・ステイーヴンは、**B**「と信じていま

した。十九世紀末の歴史家の信念だったのでしょう。かなり楽観的な認識に立脚していたとしか考えられません。

過去のどんなに短い期間であれ、いくらこまかい資料があっても、決してその過去の実像を得ることはできません。残っているのは、選び出された一部についての記録であって、その選択の^⑤偶然性、任意性がきわめて高いと想像されますが、いまとなつてはそれを検証する手立てもないのです。ほとんどすべてが時効にかかった記録ですから、過去を再現するどころか、C的な認識すら支えているのかどうか疑わしいと言わざるをえません。つまり、歴史の実体は、過去そのものとは別につくり出されたものです。事実、実際はとてつもない大きな情報をもっています。そのままはどういて再現できません。ごくごく一部を選び出すのですが、それには時のはたらしによる変形や細部の亡失がつきものです。そのための時間がない、^⑥“同時代”について歴史が存在しにくい理由もそこにあります。われわれは^⑦歴史を過信してきたようで、その分、歴史から裏切られたといってもよいでしょう。^⑧新しい歴史観が求められます。

— 中略 —

われわれは、歴史は過去の事実、事件、文化を誤りなく伝えていると教え込まれ、検証することもなく、それを信じます。歴史を記録しているのは言語ですが、その言語についても、十分な理解をとみなわかないまま、一種の信念のように、ことばはものごとを忠実に表現することができるように考えています。

ことばがものごとをあるがままに再現する、などということは決してありえません。ことばはまた事実を正しく反映していません。ことばに都合のいいように加工、変形されたものが記録となります。

そういう言語によって記述された歴史が、過去を再現したり、過去を十全にとらえたりすることができないのは明らかです。

講釈師、見てきたような嘘を言い。川柳はことばの宿命をさらりと言つてみせます。歴史家を講釈師などと同列に語るべきではないでしょうが、人の話を借りて、見もしないことを見てきたように記述することはない、と断言できる人はすくないでしょう。

いかなる出来ごと、正しく忠実、あるがままに伝えることはまず不可能です。

語注

※媒体：情報・力・効果などを他に伝える仲立ちとなるもの。

問一、

A	・	C
---	---	---

にあてはまる語として最も適当なものを次のア～オより選び、それぞれ記号で答えなさい（同じ記号は複数回使用してはならない）。

ア、客観 イ、哲学 ウ、主観 エ、歴史 オ、直観

問二、——線部①「考えることもなく考えていました」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを次のア～エより選び、記号で答えなさい。

ア、考えることもなく意識していなかったということ。

イ、思考を止めることなく常に考えていたということ。

ウ、考えるまでもない常識だと思っていたということ。

エ、はつきりと意識することなく考えていたということ。

問三、——線部②「すべての学問分野は歴史的に整備されてきました」とあるが、それは「歴史」をどのようなものだと考えているからか。本文中より五字で抜き出して答えなさい。

問四、——線部③「歴史というモノが本当にあるのか、という危ない考えをいなくようになった」とあるが、なぜ「危ない考え」なのか。その理由として最も適当なものを次のア～エより選び、記号で答えなさい。

ア、歴史を疑うというのは絶対的な神をも恐れない不遜な考えだから。

イ、歴史とは絶対的なものだというそれまでの考えを覆す考えだから。

ウ、歴史はすべて歴史家によってつくられたという新鮮な考えだから。

エ、歴史を否定することは全人類を敵に回すことになる考えだから。

問五、——線部④「過去のほぼすべてにわたって、きわめて再現性の低い媒体に頼ってきた歴史は、記録というより物語というべきです」について、次の各問いに答えなさい。

1、「きわめて再現性の低い媒体」とは具体的には何のことか。本文中より三字で抜き出して答えなさい。

2、「歴史は、記録というより物語というべき」だと筆者が考えるのはなぜか。その理由となる箇所を本文中より四十字以上四十五字以内で「から」に続く形で抜き出して、はじめと終わりの五字を答えなさい。

問六、Bに入る文章として最も適当なものを次のア～エより選び、記号で答えなさい。

ア、「歴史はまた繰り返される」 イ、「歴史は歴史家の数だけある」

ウ、「歴史は過去を再現できる」 エ、「歴史は過去とは似て非なるものである」

問七、——線部⑤「偶然」の対義語を漢字二字で答えなさい。

問八、——線部⑥「『同時代』について歴史が存在しにくい理由」の説明として、**適当でないもの**を次のア～エより一つ選び、記号で答えなさい。

ア、選び出された資料が変化していくために必要な時間がないから。

イ、大きな情報から一部を選び出し、整理するには時間がかかるから。

ウ、事実を伝える記録であっても時間の経過の中で細部が失われるから。

エ、歴史とはすべて時効にかかった記録にもとづいた過去の再現だから。

問九、——線部⑦「歴史を過信してきた」について次の各問いに答えなさい。

1、「歴史を過信」するとは、歴史をどのように信じることか。そのことが述べられている二十字以上二十五字以内の箇所を「と信じる」に続く形で、本文中より抜き出して答えなさい。

2、「歴史を過信」している状態を言い換えた表現を本文中より四字で抜き出して答えなさい。

問十、——線部⑧「新しい歴史観が求められます」とあるが、筆者が考える「新しい歴史観」とはどのようなものか。「と考えるもの」に続く形で三十五字以上四十五字以内で説明しなさい。

二、次の古文を読んで後の問いに答えなさい（字数指定問題において、句読点や「」は字数に含むものとする。また、設問の都合上一部本文を改めたところがある）。

昔、長者の家の前に、（召使いの）女、物洗ひてありけり。大きな蛇出でてきて^①言ふやう、「わが言はんこと聞きてんや。^②聞かぬものならば、※押し巻きてん」と言へば、女、「何事にか侍らん。※身に耐へんほどのことは、いかでか聞き侍らでは」と言へば、蛇、口より文を吐き出して、「この内の長者に、この^③文を取らせよ」と言ふ。（女は文を）持ちて往ぬ。やがて開けて見るに、三人の娘賜へ。取らせずは、父をも母をも取り殺してん。その※設けの屋には、そこそこの池の前に釣殿^{つりどの}をして、※十七間の家を作りたるに、わが身はそれにはばかりぞと言ひたり。これを父母見て、^④泣くことかぎりなし。※大娘を呼びて言へば、「あな思ひかけず。死ぬる色なりとも、^⑤さることはし候はじ」と言ふ。※中娘に言へば、それも同じことに言ふ。※三の娘は一の愛し子にてありければ、泣く泣く呼びて言へば、「父母取らせんよりは、^⑥われこそいかにもならめ」と言ふ。あはれさかぎりなくて、泣く泣く^⑦出だし立つ。

蛇の言ひたりし池の前に家を造りて、出で往ぬ。ただ一人据えて、人々帰りぬ。※亥の時ばかりなるらんと^⑧思ふほどに、風さと吹きて、雨はらはらと降り、雷、稲妻^{いなずま}ひらひらとして、沖中より波いと高く立つやうに見ゆれば、生きたるか死にたるかと^⑨思ひて、恐ろしきせん方なく、あるかなきかにて^⑩居たるに、※十七間にはばかりほどの蛇来て言ふやう、「われを恐ろしと思ふことなかれ。もし、。わが頭斬れ」と言へば、恐ろしき、悲しけれども、爪切刀にて易く斬れぬ。直衣^{のうし}着たる男の、まことに美しきが走り出でて、※皮をばかいまどひて、恐ろしさも忘れて、^⑪語らひ臥しぬ。

「御伽草子」より

※押し巻きてん……押し巻いて殺してしまうぞ。

※身に耐へんほどのことは、いかでか聞き侍らでは……私にできることならばきつと聞き届けてあげますよ。

※設けの屋には、そこそこの池の前に釣殿をして……準備のための家として、どこそこの池の前に釣殿を作れ。釣殿は寝殿造りの池に面した建物。

※十七間の家を作りたるに、わが身はそれにはばかりぞ……十七間もある家を作ったとしても、自分がそこに入るといっぴいになってしまふぞ。間は建物の外側の柱と柱との長さで、十七間は約三十一メートル。

※大娘、中娘、三の娘……長女、次女、末娘。

※亥の時……午後十時頃。

※十七間にはばかりほどの……十七間がいっぴいになるほどの

※皮をばかいまとひて……皮を上にとつて

問一、——線部④「言ふやう」・⑤「語らひ」をそれぞれ現代かなづかいに直してひらがなで答えなさい。

問二、——線部①、⑤の本文中での意味として最も適当なものを次のア～エより選び、それぞれ記号で答えなさい。

- | | |
|---|---|
| ① | ⑤ |
| <p>ア、もし聞こうとするならば</p> <p>イ、もし聞かないというのならば</p> <p>ウ、もし聞いてしまったのならば</p> <p>エ、もし聞きたいというのならば</p> | <p>ア、私がどうにかしてみせましょう。</p> <p>イ、私こそ生き残るべきでしょう。</p> <p>ウ、私がどうにでもなりましょう。</p> <p>エ、私でもどうにもなりません。</p> |

問三、——線部②「文」の内容に当たる部分を本文中より探し、はじめと終わりの三字を抜き出して答えなさい。

問四、——線部③「泣くことかぎりなし」について、父母が泣いている理由を三十字以上四十字以内の口語で説明しなさい。

問五、——線部④「さること」は「そのようなこと」という意味だが、どのようなことか。その具体的内容を十字以上十五字以内の口語で答えなさい。

問六、には現代語訳すれば「刀は持っているか」という意味の古語が入る。あとの助動詞の活用表を参考にして、空欄に入れる最も適当なものを

次のア～エより選び、記号で答えなさい。

ア、刀こそ持ちたれ

イ、刀や持ちたる

ウ、刀ぞ持ちたる

エ、刀か持ちたれ

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
たり	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ

問七、——線部ア～エの中から、動作主が違ふものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア、出だし立つ

イ、思ふ

ウ、思ひて

エ、居たる

問八、本文中に出てくる「蛇」と同じものを指している別の語を本文中より六字で抜き出して答えなさい。

三、次の文章を読んで後の問いに答えなさい（同じ記号を複数回使用してもよいこととする）。

夕方からひどい雨になった。山々の姿が遠近を失って、①白く染まり、前の小川が見る見る黄色く濁って音を高めた。こんな雨では踊子たちが流して②来ることもあるまいと思いがら、私はじっと坐^{すわ}っていられないので二度も三度も湯にはいつてみたりしていた。部屋はうす暗^{ふすま}かった。隣室との襖^{ふすま}を四角く切り抜いたところに鴨居^{かもい}から電燈^{でんとう}が下^さっていて、一つの明りが二室兼用になっているのだった。

ととんとんと、激しい雨の音の遠くに太鼓^{たいこ}の響^{ひび}きが微かに生れた。私は掻^かき破るように雨戸を明けて体を乗り出した。太鼓の音が近づいて来るようだ。雨風が私の頭を叩^{たた}いた。私は眼を閉じて耳を澄ましながら、太鼓がどこをどう歩いてここへ来るかを知らうとした。間もなく三味線の音が聞えた。女の長い叫び声が聞えた。そして芸人たちは木賃宿^{きちんやど}と向い合った料理屋のお座敷に呼ばれているのだと分った。二三人の女の声と三四人の男の声とが聞き分けられた。そこが③すめばこちらへ流して来るのだろうと待っていた。④しかしその酒宴^{しゅえん}は陽気を越えてばか騒ぎになって行くらしい。女の金切声^{きんぎり}がときどき稲妻^{いなずま}のように闇夜^{やみよ}に鋭く通った。私は神経を尖らせて、いつまでも戸を明けたまま⑤じっと坐^{すわ}っていた。太鼓の音が聞えるたびに胸がほうと明るんだ。

「⑥ああ、踊子はまだ宴席^{すわ}に坐^{すわ}っていたのだ。坐^{すわ}って太鼓を打っているのだ」

太鼓が止むとたまらなかつた。雨の音の底に私は沈み込んでしまった。

やがて、皆が追いかけて⑦を⑧しているのか、踊り廻^{まわ}っているのか、乱れた足音がしばらく続いた。そして、ぴたと静まり返ってしまった。私は眼を光らせた。この⑨静けさが何であるかを闇を通して⑩見ようとした。踊子の今夜が⑪汚れるのであるうかと悩ましかった。

川端康成『伊豆の踊子』より

問一、——線部①～⑨について、その単語の品詞名を次のア～コより選び、それぞれ記号で答えなさい。

- | | | | | |
|-------|-------|-------|--------|------|
| ア、名詞 | イ、動詞 | ウ、形容詞 | エ、形容動詞 | オ、副詞 |
| カ、連体詞 | キ、接続詞 | ク、感動詞 | ケ、助動詞 | コ、助詞 |

問二、——線部①～⑨の動詞の活用の種類を次のア～オより選び、それぞれ記号で答えなさい。また、その活用形もそれぞれ正しい漢字で答えなさい。

- | | | | | |
|--------|---------|---------|----------|----------|
| ア、五段活用 | イ、上一段活用 | ウ、下一段活用 | エ、カ行変格活用 | オ、サ行変格活用 |
|--------|---------|---------|----------|----------|

四、次の①～⑩について、――線部のカタカナは漢字に直し、漢字はひらがなで読みを答えなさい（なお、送りがなは不要とする）。

- ① 授業でケンビキヨウを使う。
- ② 仕事にセンネンする。
- ③ ケイイを説明する。
- ④ ガンペキにたたずむ。
- ⑤ シュウシン時間が早い。
- ⑥ 芳名帳に記載する。
- ⑦ 事実と符合する。
- ⑧ 橋の欄干にたたずむ。
- ⑨ 玄人の芸風に感化される。
- ⑩ 鋭い感覚の持ち主だ。